
ルカと壊す世界

しゃヴえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルカと壊す世界

【Nコード】

N8802P

【作者名】

しゃヴえ

【あらすじ】

殺し屋女子中生「ルカ」と平凡男子「エイジ」が出会う。

エイジと出会い、徐々にルカは変わっていく……

これは「ルカ」と「エイジ」の変化の物語。

1 (前書き)

「女王さまと召使」の基盤となった話です。
若干重複する部分があります。

だらだら更新します。

第一話。

夏の夕暮れ。午後7時。

光学迷彩服を着たルカは、ビルの屋上からサイレンサー付ライフルを構えていた。

標的は悪人。そいつは人を殺すのに直接は手を下していないが、殺せと命じ、すでに六人殺されている。

今までこいつを野放しにしていたルカは自分が憎かった。標的が入ったと聞いたビルの入り口をルカはスコープ越しで覗いていた。

今日は体調が良い。そう彼女は思った。手の震えを抑える薬も飲んだ。視界も良好。彼女はただじっと標的が出てくるのを待った。

午後8時26分。

ルカは体勢を崩さず約一時間半を過ごしていた。標的がビルから出てくるのをスコープで確認した。

ライフルのトリガーに指をかける。そして肩にかかる衝撃と共に弾丸が射出された。

スコープ越しで火花が散るのをルカは見た。ルカは思わず舌打ちをする。

「ちっ……、言葉遊びが守ってやがる……」

整った顔立ちには不釣り合いな荒い言葉遣いでルカは言った。ルカの放った弾丸は標的に当たる前に別の弾丸によってはじかれた。こんな芸当ができるのは言葉遊びしかない。そう考え、この場に言葉遊びがいることを認識した。

ルカは考えた。これで言葉遊びと対立するのは四回目。そして、同じ側に立ったのは一回だけ。

ルカは言葉遊びに会ったことがあった。言葉遊びの能力を知ったときは驚いたものだ。奴も永遠研究所で改造を受けた人間の一人だった。奴の目は神の目だ。

ルカは標的がまだ自分に気づいていないことを確認すると、再びスコープを覗いた。

「言葉遊びの能力は把握しているし、奴の使う銃の装弾数も知っている」

ルカは再びライフルのトリガーを引いた。

再び火花が散る。二発目。

ルカは思った。言葉遊びは相手が私だと気づいているだろうか？少し考えた後、それはないなと思った。

トリガーを引く。火花が散る。

トリガーを引く。火花が散る。

四回目。あと二発でお前のライフルの装填されている弾丸はなくなるぞ？

ルカは心の中で言葉遊びに言った。

トリガーを引く。火花が散る。

トリガーを引く。火花が散る。

六発目。

嗚呼、やっと殺せる。

言葉遊びに装弾させる隙を作らないために即座にトリガーを引いた。スコープの奥で標的が倒れる。処刑終了。ルカは心の中でそう呟いた。

「こつちを撃つてくる度胸がないし、実績もない。だが、こちらの撃った弾丸を狙撃で撃ち落とす技術には驚く・・・」

こうして今日も一人の罪人が葬られたのだった。

次の日。

午前6時。ルカは自室で起床した。

ルカの部屋は広く、調度品は白色に統一されていた。クローゼツ

トも、冷蔵庫も、ベットも。完璧な白の世界だった。着ている寝間着すら上下ともに白で統一されている。

ルカはシャワーを浴びるために浴室に向かった。

浴室には髪を洗うためのシャンプーが30と2本ある。それぞれマジックで番号が書かれていた。

今日は19日。ルカはカレンダーの日付と同じ番号の十九番を使った。

ルカは朝起きて最初にするのがシャワーを浴びることだった。ルカは永遠研究所に住み着いてから二年間ずっと毎日洗っている。それが彼女のルールだった。一度も忘れた日はない。

1番から31番までちゃんと番号がふられている。残る一本には番号は書かれていなかった。その代わりに星マークが描かれていた。彼女がそれを使うときは人を殺す日だけ。それも彼女のルール。

浴室から出て、タオルで身体と髪を拭き終わると、学校の制服に着替え始めた。彼女の通う第四中学校の制服だ。

ルカの背中には07という数字が文字として刻まれていた。着替え終わると部屋のドアを開き出て行った。

永遠研究所内にルカの部屋はある。永遠研究所では人間を使った実験を毎日している。人間を徹底的に研究する。それが永遠研究所の基本理念だ。

廊下を進むルカの前に二人の黒服を着た男が歩いてきた。

ルカは二人を見つけると今朝から運が悪い。と思った。小さいほうの男がルカに気づく。手をふりながら近づいてきた。

「やあ天使ちゃん。昨夜はお疲れ様〜」

「カゲロウ、朝から何やってんだ？」

黒服を着た二人、

小さい男のカゲロウと大きい男のコンドウは研究員ではない。外で実験材料となる人間を見つけ、研究所に売って金を取る外注みないな存在だ。正式な研究所の人間ではない。

この二人もルカが殺したくなる悪人。カゲロウの方は特に殺した

くなる存在なのだがルカの願いを二人は叶えてくれた人なのでルカは我慢している。

「学校まで送ろうかい？」

カゲロウはルカにそう訊いたが、ルカは無視して廊下を進んでいった。こいつらは金のことしか頭にない金の亡者。どうせ学校へ送るから金をくれとでも言いたかったのだろう。

「お金くれるならなんでもするよ？」

ほらやっぱり。ルカの思ったとおりだった。ルカの後ろをカゲロウがついてくる。

「金などない。お前らは外で金になりそうな奴にでもたかっければいい」

ルカは言い放った。するとカゲロウは嫌な笑みを口元に浮かべる。

「・・・朝から私にたかりに来たのか？」

「そんなところ」

カゲロウが微笑んで答える。

「実は新しい犯罪者リストが手に入ったんだよ。買わない？」

「・・・金額は？」

ルカは立ち止まり言った。カゲロウが満面の笑みをする。

「85・・・いや90」

「面倒だ。100万でいい」

ルカがそう言うと、カゲロウがコンドウを呼んだ。コンドウはのそのそとカゲロウの元に来る。

カゲロウはコンドウに手を出すとコンドウは胸元のポケットからマイクロディスクをカゲロウの手に置いた。カゲロウはそれを受け取るとルカの前まで歩いてきた。

「先にお金」

「金なら私の母から受け取れ。私は一銭も持っていない。知ってるはずだ」

「わかってるよ〜ん。わざと言ってみた」

「・・・殺されたいのか？」

カゲロウはにやあつと笑ってルカの手を取ろうとする。ルカは即座にその手を払う。そしてマイクロディスクをカゲロウから奪い取った。

「じゃあねえ」

カゲロウはヒョウヒョウと歩き始め、コンドウがそれについていく。そして廊下の先へ消えた。

「・・・まったく、触っただけで相手の悪意を見ちまうのも問題ありだな。こっちの精神がもたないぜ。ただでさえ空気を伝ってわかっちゃうのに」

そう呟いたルカはマイクロディスクをバックの中にしまった。

第四中学校の三年A組の教室。その窓際の席にルカはいた。

昼休みの時間なのにルカの周りには誰も寄り付かなかった。何故なら彼女はこの学校の中で一番恐れられている存在だからだ。

中学生になってからの三年間の間にルカにケンカを売った奴は全員再起不能になるまでやられていた。

永遠研究所で改造を受ける前でも気性の荒いルカは強かった。

集団でバットやナイフを持ってルカを半殺しにしようとした奴らは逆に殺された。

それ以来、ルカにケンカを売る者はいなくなった。そして友達もいなくなった。

学校内の不良でさえも近づかなかった。

ルカはそれでいいと思った。私は殺し屋だ。冷酷な殺し屋だ、と私に関わる人間は必ず不幸になる。最近ではそうも思っていた。

ルカは持ち運び可能なモバイルパソコンとマイクロメディアをバックから取り出した。パソコンを起動させるとルカは丁重にマイクロメディアを挿入した。

外付マウスで操作をしていき、犯罪者リストを開いた。

五十音順に表示された犯罪者たちの名前を眺め、この世界には犯罪者が多すぎる。とルカはぼやっと思った。

今回カゲロウから買った犯罪者リストには113人の犯罪者が新しく追加されていた。

ルカはその犯罪者たちの顔と犯した罪を記憶していった。その作業は昼休みの時間が終わり、授業中も続いた。教師は注意しなかった。教師すらルカを恐れているのだ。

ルカは学校が終わると街の大通りへ向かった。ルカは大通りを歩きながら周囲に漂う悪意を探った。すると近くの暗い路地裏から悪意の気配があった。

「悪意の匂いがする・・・」

すぐさま路地裏に進んでいった。数十秒歩くと奥から人のうめき声が聞こえてきた。

「・・・ケンカか？」

ルカはバツクに手をつっこむと、そのまま進んでいった。

そこには三人の男が一人の男を暴行していた。

路地裏にルカが現れて、三人は無意識にルカを見た。その瞬間、三人の表情が恐怖に染まった。

「る、ルカだ!!!」

三人の男たちはルカのわきを通って大通りへ逃げていった。

「まあいい。つたく、カツアゲってところか？」

ルカはその場を後にしようとしたが、暴行を受けていた男のことが気になったルカは男のもとまで歩いていった。

男は苦痛に顔を歪め、うめいていた。

「お前、大丈夫か？」

男はルカの顔を見た。そしてこう言った。

「ありがとう・・・、助かったよ・・・」

ルカは意外だった。まさかこの私が感謝されるとは。そう思った。

「よそ者か？」

ルカは男の手を取り、立ち上がらせた。

「そうなんだ・・・、この街にこの前引っ越してきたばかりで・・・」

「。。痛てえっ！」

ルカは思った。私を知らないから私に感謝をしたのだな。と。その時ルカは気づいた。この男が第四中学校の制服を着ていることに黒いズボンとシャツだけなので最初はわからなかったが、シャツの紋章で判明した。

第四中学校で私を知らないだと？ルカは不思議に思った。

「お前、知らない顔だな？」

男は服に付いたほこりを払いながらルカを見た。

「あ、ああ。。。その制服。。。君も第四中学校の生徒なんだ。。。僕は三年A組に転入することになるエイジ。。。痛たた。。。」

「私と同じクラスだな」

ルカは冷静に言った。

「そうなの！？そりや奇遇だなあ！明日から登校するんだ。今日は見学しに行ってきたんだけど、帰り道の途中でさっきの奴らに絡まれて。。。」

同じ教室だ。噂もすぐに聞くだろう。

このエイジという男もいずれ私を嫌うのだろうな。そうルカは思い、帰ろうとした。

「待って！名前。。。教えてくれないかな？」

ルカは立ち止まった。そしてルカは小さく自分の名前を言った。

「ルカさんだね！じゃあね！また明日！」

ルカはエイジをおいて裏路地を後にした。

研究所に帰ったルカは部屋に入るとバツクを机に置き、制服を脱ぎ始めた。

そして浴室でシャワーを浴びた。シャンプーは19番を使った。

ルカは浴室を出て、

タオルで身体を拭きながらクローゼットから今日の寝間着を取り出した。それを着ながら部屋のパソコンを起動させた。そしてバツ

クからマイクロメディアを取り出し、パソコンに挿入した。
マイクロメディア内の犯罪者リストを開き、学校で行っていた作
業の続きをした。こうして夜は更けていった。

今日もまた一日が始まった。ルカはそう考えながら学校へ登校し
た。

「ルカさくん」

後ろから大声で名前を呼ばれたルカは振り返った。周囲の人も声
の発せられた方を向いた。

遠くから走ってくるエイジがルカには見えた。だいたいの予想は
していたがまさか大声で名前を呼ばれるとは……。そうルカは思
い、ため息をついた。

そう思っていたらあつという間にエイジがルカの横に来た。

「ルカさんおはよう」

エイジは礼儀正しく挨拶した。ルカも返す。返した後、ルカはこ
う言った。

「エイジ。私の名前を大声で言わないでくれる？迷惑」

「あ、すいません……。つい興奮しちゃって……」

エイジはぺこぺこ謝る。

「まあ、怒ってないからいいけど」

「すいません……」

「行くぞ」

「はい！」

ルカとエイジは二人で校門から学校内へ入った。

「じゃあまた後で」

エイジはそういうとルカの隣から離れて去っていった。たぶん教
職員室にでも行ったのだろうとルカは考えた。ルカはいつも通り教
室内に入っていく。

入った瞬間、教室内を沈黙が支配した。いつものことなのでルカ
は気にしなかった。そのまま席につく。ルカはバックから本を取り

出すと読み始めた。

本はホームルーム開始チャイムが鳴るまで開かれ続けた。チャイムが鳴ってすぐ、エイジと担任の教師が入ってきた。教室内がざわめく。教師がこほん、とセキをすると話し始めた。

「今日から皆さんと一緒に学ぶ、タニグチ・エイジくんです」

教室のどこからか、かつこいい、という声が多数聞こえた。

「タニグチ・エイジです。よろしくお願いします」

そう言っただけでエイジはお辞儀をした。

「じゃあ好きなところ座って。この学校では自由席になっているから」

「わかりました」

そう言ったエイジは真つ先にルカの隣の席に座った。他の生徒たちもざわめいた。

「なんで私の隣に来る？」

ルカはエイジの顔を見ずに言った。

「ルカさんは僕の恩人だから何か役に立とうと思って・・・」

「私と関わるとろくなことがないと思うが・・・」

「まだ知り合った人いないし、ルカさんと友達になりたいんですよ。教室が静まり返る。エイジの言葉を聞いたからだ。」

「・・・好きにしろ」

ルカは窓の外を見て言った。

「わかりました。好きにします」

こうしてルカは数年ぶりの友人というものが手に入った。

第四中学校。昼休み中。ルカは屋上にいた。ルカは移動するときは常に持ち歩いているバックからタバコを取り出した。そしてライターで火をつける。ぶかあつとルカは口から煙を吐いた。最高のひと時だ。そうルカは思った。

教室内で弁当箱を持ったエイジはルカを探していた。クラスメイトに話しかけて何処にいるのか訊いていた。

「ルカさん、何処にいるのかわかる？」

「・・・関わらないほうがいいよ」

ルカの居場所を訊かれた男子生徒がそう言った。

「え？なんで？」

「・・・君は転入してきたばかりだから知らないかもしれないけど、あいつは暴力的でケンカだってする。不良なんだよ」

「そうなの？」

「昔、協調性のないあいつをシメようとした不良の先輩たちが全員殺されたって話だ」

「殺された・・・？」

「あいつ、人を殺すことに慣れてるんだよ」

「なんで？」

「さあな・・・。とにかく近づかないほうがいいぜ？」

「わかった。忠告、ありがとう」

男子生徒にエイジはお礼を言って教室を出た。そして廊下で大声で騒いでいる三人の不良たちに話しかけた。

「あの、ちよつといいですか？」

「んだよ？テメエ？」

不良はエイジを睨んだ。エイジは臆せず話を進めた。

「訊きたいことがあるんですけど、不良のことなら色々詳しいかなと思つて……」

「なんだよ？」

「あの、ルカさんが何処にいるのか知りませんか？」

不良たちが黙り込んだ。エイジは何か悪いことでも訊いたかな？と思つた。

「知ってますか？」

だが、エイジは再び訊いた。

「屋上だ！わかつたんならさっさと消えろ！」

「ありがとうございます！」

お礼を言つて、エイジは走つて階段を上つていった。

階段を上つて行つたエイジが見えなくなるのを待つて不良たちは話しかけてきたエイジについて話し始めた。

「何だあいつ？」

「この前誰かが言つてた転入生だろ？見ない顔だ」

「何で転入生があいつを探していたんだ？」

「……あまり関わらないほうがよさそうだな」

「そうだな」

不良たちはそう結論を出して再び大きな声で騒ぎ出した。

フェンスの外を見ながらルカはタバコを吸つていた。

ルカは誰もいない屋上が好きだった。元々、他の不良たちがたむろしていた場所だったのだが、ルカが頻繁に来るようになってから消えていった。

ルカは吸つていたタバコを捨て、靴でもみ消した。そして次のタバコに火をつけた。

雲の浮かんだ空に太陽があり、風が髪を揺らす。自然とは完璧な世界だ。とルカは改めて思った。そして人間とは完璧な自然を壊す悪だ。と、いつもの考えをめぐらした。

その時、屋上の扉がガチャッと開かれた。ルカは自分のテリトリ

―に入ってきた者をにらみつけた。

屋上に来たのはエイジだった。

「やっと見つけた！ルカさん、何してんの？」

エイジはルカの方に向かって歩き始めた。

「・・・タバコ吸ってんの」

「未成年者は法律で喫煙は禁じられているよ？」

「いいんだよ、私は。お前こそ何しに来た？」

「一緒に昼食をとろうかなと思って」

「なんで？」

「だって友達でしょ？当然じゃない」

「友達ねえ・・・」

「いいでしょ？」

「・・・好きにしる」

エイジはルカの元に着くと、ルカの立っている横に座り、弁当箱を開けた。そして食べ始めた。その間、ルカはタバコを吸い終わり、もう一本吸い始めていた。エイジは弁当を食べ終わるとルカの方を向いて話しかけた。

「ルカさんって不良なの？」

「あ？」

ルカはエイジを睨みつけた。だがエイジは全然ひるまなかった。

あきれたルカは、そうなのかもしれないな。と呟いた。

「昔、先輩を殺したって本当なの？」

ルカは黙っていた。エイジはもう一度、本当なの？と訊いた。

「それを言っただうなるってんだ？」

ルカはフェンスの外の景色を見ながらエイジに訊いた。エイジは考えた後、こう答えた。

「どうにもならないけど？」

「・・・ふふっ」

突然笑ったルカにエイジは、どうしたの？と訊いた。

「お前は面白い奴だな。人殺しかもしれない奴に平気で話しかける・

「……」
ルカは笑いながらエイジの顔を一瞬見た。エイジはルカの方に向いていた。

「殺したの？」

「殺したよ。確か人数は五人だったな……」

ルカは躊躇わずそう言った。

「どうして殺したの？」

エイジは何も知らない子供のようルカに質問した。

「私は不良が嫌いなんだよ。虫唾が走る」

「じゃあルカは不良じゃないの？」

「わからない。周りからは不良と思われる」

「タバコも吸ってるしね」

エイジは笑いながら言った。ルカも、確かに。と言って笑った。

「ルカさんは不良なのかもしれないけどいい人だよ」

ルカはエイジを見た。そしてどういう意味だ？と訊いた。

「なんとなくわかるんだよ。ルカさんは悪い人じゃない」

私が悪い人じゃないかと？そう思ってルカは遠くを見た。

「人を殺しても悪い人じゃないのか？」

ルカはエイジに訊いた。

「人を殺すことは悪いことだよ。でもそれ以上にルカさんはいい人だよ」

エイジは立ち上がった。ルカと同じようにフェンスの外を見た。

「何か見えるの？」

「……別に何も見えないよ」

放課後になり、部活のない生徒たちは学校から帰宅していった。ルカが帰ろうとした時、隣の席の帰る準備を終えたエイジが話しかけてきた。

「ルカさん、一緒に帰らない？」

ルカは、しつこい奴だ。と思った。そしていつものように、好き

にしる。と言った。

校門を一緒に出る二人。

「ルカさんの家って何処にあるの？」

「私の家はここから歩いて二十分ぐらいのところにある」

エイジはふうくん。と言った。

「僕の家はこの前の大通りから近いんだ」

「別に訊いてない」

「そうだね。ははっ・・・」

エイジは力のない声で言っただけで笑った。そんなエイジを見たルカは、別に興味がないわけではない。と言っただけであげた。それを聞いたエイジの表情はパツと明るくなった。単純な奴だ。ルカはそう思った。

「ルカさんって家でいつも何をしているの？」

「知りたいか？」

エイジは元気よく頷いた。

「じゃあ私の家に来るか？」

ルカは気まぐれで自分の言った言葉を取り消したかった。だがもう遅かった。エイジは嬉しそうに、行きたい！と言い頷いていた。

ルカはため息をついた。エイジがどうしたの？と訊いてきたが答えなかった。

「こ、ここがルカさんの家？」

エイジは目の前の『永遠研究所』という文字を見てそう言った。

「ルカさんってもしかしてここのお嬢様？」

「いや、私は養子だ。本当の両親は私の小さかった頃死んだ」

「そ、そうなんだ・・・」

エイジは明らかに驚いているようだった。それもそうだ。普通研究所が家なのと言ったら大抵の奴は驚く。ルカはエイジの手を引っ張って中に進んでいった。

長い廊下を歩く二人。エイジは周囲を見ながら歩いていた。ルカは鍵を使って自分の部屋のドアを開けた。

「入って」

「う、うん」

エイジはルカに言われた通り部屋に入った。その時、自動的に部屋の照明が点いた。それにわつと驚くエイジ。

「いちいち驚くな」

「だ、だつて凄いいじゃないか・・・」

「私にはもう普通のことだ。適当に椅子にでも座ってくれ」

エイジは部屋に一つしかない机の横の椅子に座った。ルカはおもむろに服を脱ぎだす。

「え！？ちよつと！！ルカさん！！」

「あ？なんだ？」

「なんで脱ぐんですか！？」

「家に帰ってきたらシャワーを浴びる。それが私のルールだ」

そう言つてルカはどんどん服を脱いでいく。背中のお7という番号があらわになる。そして下着だけになってようやく浴室に向かった。

ルカさんは大胆すぎというか自分に無関心だなあとエイジは思った。

エイジは壁のほうを向いてルカが浴室から出てくるのを待っていた。十数分後、ルカは裸にバスタオルだけ持つて出てきた。エイジは緊張した。

「お前、壁なんか見ている楽しいのか？」

「いや・・・、そつち見たら悪いかなと思つて・・・」

「何がだ？」

ルカはバスタオルで頭を拭きながらエイジの顔を横から覗いた。

「ちよ！ちよつとルカさん！！」

エイジは即座にルカのいる反対側に顔を向けた。

「なんだ？何でそんなに大声を出す？なんで顔をそむける？」

「普通女の子は裸を見られたら恥ずかしがりますよ！！何でそんなに開放的なんですか！？」

「私の家だから私の好きなようにしていいだろう？当たり前のことだ」

「僕がいるんだから少しは恥らってくださいよー!!」

「恥じらいなどとうの昔に捨てた」

「じゃあ拾ってきてくださいー!!」

面白い奴だ。そうルカは改めて思った。

「わかったよ。今、服を着るから待ってる」

ルカはクローゼットから寝間着を取り出した。そしてのろのろと着た。

「・・・着たぞ。もう大丈夫だろう？」

「はあ・・・。ルカさんがこんな人とは想像がつかなかった・・・。こいつはどんな私を想像していたんだ？と疑問に思ったが訊かなかった。

「私ที่บ้านで何をしているのか知りたいんだろう？」

「はい。そうです・・・」

ルカはバックから鍵束を出した。それを持ってベッドの方へ歩いていった。

「何するんですか？」

「銃のメンテナンスだ」

「じゅ、銃!？」

ルカはベッドの横に立ち、屈んだ。そして鍵束から一つの鍵を選び出して床にある鍵穴に差し込んだ。まわす。するとベッドがエレベーターが上がっていくようにすり上がり、その下から一つの部屋が出てきた。

「ちょっと来い」

「な、なんですか？」

エイジはルカに言われた通りルカのもとに歩いていった。

ルカは部屋のドアを開ける。そして様々な銃を部屋から出した。小型拳銃からサブマシンガンなど様々な銃をエイジに披露した。

「お前、身を守るものは持っているか？」

？」

「両親が仕送りしてくれて、それで生活してます」

ルカは考えた。エイジも色々あるんだなと。ただの男じゃないと思っただ。

「お前、ここに住んだらどうだ？私の母に言ってやるのか？」

「え？どうしてそんなことを？」

「お前に興味が沸いた。私はお前のことがもつと知りたい」

ルカは真面目な顔をしてそう言った。エイジは困った顔をした。

「そんな・・・、悪いですよ・・・」

「何が悪い？」

友達として普通なんじゃないのか？それが友達というものだろう」

「そうですかね・・・？」

「遠慮するな。ここに住めばいい。そうすればお前の両親の負担もなくなるだろう？」

「でもいきなりは・・・」

「引越しのことか？」

「・・・はい。お金を引越しに使っちゃうんで・・・」

「お前の家の住所は？」

エイジは戸惑いながらも住所を口にした。それを聞いたルカは携帯電話をバックから出し、誰かに電話をかけた。数秒の後、ルカは話し始めた。

「カゲロウか？金やるからやってもらいたいことがある。あ？殺しじゃねえよ。引越し屋だ。コンドウを使えば簡単だろうが。ああ。金はそれでいい。受け取りは母のところに行け。荷物は私の部屋の前に置いとけ。あ、ちゃんとダンボール使えよ？そのまま持ってこられても困るからな・・・。よろしく・・・」

ルカは電話を切った。

「今からお前の家の荷物を全部ここに持ってくるよう命令した。決定だ。お前はここに住め」

「え、ちよつと。何の話をしていたんですか？」

「引越しの話だ」

「ちよつと困りますよ!」

エイジはいきなりの話に困惑していた。

「大丈夫だ。私がいる。私は存在するだけで金になるんだからな・

」

「どういう意味です?」

「そのままの意味だ」

エイジはため息をついて、ルカさんには逆らえませんよ。と言った。それを聞いたルカはエイジに、まるで下僕だな。と言った。

「申し訳ないと思うのなら、私の役に立て。最初言っただろう?役に立ちたいとな」

確かに言いました……。そう言ったエイジはまさかこんなところでその約束が適応されるとは。と思った。

「お前は今日から私の下僕だ」

ルカは笑いながら言った。エイジはとんでもない女王様の下で働くことになったなあ……。と思った。

朝六時ジャスト。ルカは目覚めた。ベッドの上で伸びをした。隣を見てみる。ルカの横でエイジが丸くなってスウー スウー 寝息を立てていた。

「まったく、この状況、笑えるな・・・」

こうなったのも勢いという奴だ。ルカは考えた。まさか自分が他人に興味を沸くというのは殺す相手以外に初めてだった。昨日の夜からエイジはルカの家で暮らすことになったのだ。そして、何故ルカの隣で寝ていたかという、それはルカが命令したからだった。

その時の台詞をルカはふふつと笑いながら思い出す。

「面白そうだからお前、私の隣で寝ろよ」

まったく。その台詞を言った自分が信じられない。

最初は抵抗していたエイジだったが、ルカが甘えるように、駄目か？と訊いたら渋々了承したのだった。

私はいつも一人で寂しかったのだろうか？

わからない。考えてもわからなかった。

ただエイジが現れて、ルカの生活は徐々に変わりつつあった。

今日は土曜日。学校は休みだ。

ルカは毎朝のルールを守るため、浴室にシャワーを浴びに行った。21番のシャンプーを使わなければ。ルカはカレンダーの日付と同じ数のシャンプーを使おうと思ったのだが、考え直して星マークのシャンプーを使った。

シャワーを浴びている間に色々これからのことを考えた。

エイジのことだ。

エイジがここに住むからにはエイジのことも考えて行動しなければならぬ。たとえば、彼専用のシャンプーの用意とか。そうルカ

は考えた。

エイジがまだ寝ているのを確認して、クローゼットから今日の服を選んだ。ルカの背中の中07という番号が目立って見えた。

中にしまわれている服は全部白かった。その中から今日の下着と白いシャツ、白いズボンを選んだ。ルカは着替える前にこんな悪戯を思いついた。

私が裸でエイジを起こしたらどうなるだろうか？

面白そうなので試すことにした。

「おい、お前。起きろ」

エイジの身体をゆすつてそうルカは言った。

エイジはむにやむにや言いながら起き上がった。そしてルカを見た。数秒ボーっとルカを見ていたが、突然顔を赤くしてルカの立つ反対側にすぐに顔を背けた。

「ふふっ……、悪戯成功……」

「ちよつと！ルカさん！朝からなんですか！？」

「悪戯だよ。面白い反応だ」

「僕で遊ばないでくださいよぉ！」

「私より起きるのが遅かったからその罰だ」

「そんなぁ、今何時ですかぁ？」

「六時半だ」

起きるの早すぎですよ。とエイジは言った。ルカは再び笑って、さつき選んだ服を着始めた。

「もう大丈夫だ。こつちを向け」

「本当ですかぁ？」

ルカは疑うのか？と言って机の横にある椅子に座った。

エイジはゆっくりと警戒しながらルカの方を向いた。エイジは危険がないことを認識したため息をついた。

「私の身体を見といてため息とは……」

「いや、そういう意味でため息をしたわけではないです」

「わかってるよ、そのぐらい」

エイジはベットから下りて昨日の夜中、室内に運んだダンボールを開けて何か探していた。ダンボールの箱を数個開けてエイジの探し物は見つかったようだ。それは歯ブラシだった。

エイジは笑いながら、歯を磨かないと一日がちゃんと始まらない感じがして。と言った。

「それがお前のルールか？」

「ルールってほどではないですけど、まあそんな感じです」

ルカは浴室に洗面台があるとエイジに教えた。ありがとうと言ってエイジは浴室に向かって行った。シャカシャカと規則正しい音が聞こえてきた。数分してエイジは出てきた。

「今日は学校は休みですね。ルカさんは今日何をするんですか？」

「処刑人の仕事でもしようと思っている」

「あの、昨日も思ってたんですけど処刑人ってどんな仕事ですか？」

ルカは考えた。人に話したことがないからだ。

「そうだな・・・、悪人を殺す仕事だ」

「人を殺すんですか？どうして？」

「それには深いわけがある。本当の両親は私が小さい頃に死んだと言ったな？」

「はい。確かに言いましたね」

「交通事故で死んだんだが、その時私も一緒に車に乗っていたんだ」

「よく助かりましたね・・・？」

「私も生死の境を行き来したらしい。覚えてないがな。で、何とか生き残ったわけだ。その時に不思議な力を手に入れたんだ」

「不思議な力ですか？なんですかそれ？」

「なんとというか永遠研究所では私はハイアナライザと呼ばれている。意味は知らないが何かを感知する能力者のことを指すらしい」

「何かってというのは何ですか？」

「私の場合、人の悪意を感知することができる、かな？」

触ったりすれば確実にその人間が罪を犯したかどうか分かる。空気を伝って感じ取ることもできる。お前を偶然助けたときも悪意を

察知したからだ」

「へえー、とエイジは軽く驚いていた。」

「ルカさんは超能力を事故で手に入れたんですね」

「そんなところだ。それから中学に入ってちよつとしてから永遠研究所に住むようになった」

エイジはそれを聴いていて、ここは何をしているのかと昨日思った疑問を思い出した。

「この研究所って何を研究しているんですか？昨日から気になってたんですけど」

「ここでは人間を使った実験をしている。人間を徹底的に研究するのが永遠研究所だ」

「なんか悪の組織みたいですね」

「研究に悪も正義もないぜ？何を基準に悪と正義を分けるんだ？」

「さあ？利用目的ですかね？」

「そうだ。とルカは頷いた。」

「科学は悪にも正義にもどちらにでもなりうる。使う者次第だ」

「そうですね。人間を使ってどんな実験を？」

「最終目的は不老不死らしいが現状では程遠いな。実験では人間をサイボーグにして遊んでる。無邪気なもんだ」

「SFの世界ですね。知りませんでしたよこんな研究所が地球にあるなんて」

「非公開情報だからな」

「・・・は？」

エイジはルカの言った意味がわかっていないようだった。

「世界にはこのことと同じような研究所が腐るほどある。国によって隠蔽されているんだよ。一般人で知っているのは今教わったお前ぐらいだ」

「そんな言い方だとルカさんは一般人じゃないみたいですね」

「私も身体を機械のものと入れ替えてある。ここで生まれたサイボーグだから知っていて当然だ」

「そうなんですか？全然わかりませんね・・・」

「背中に番号が刻まれている。07番だ。見るか？」

エイジは首を振って、やめときます。と言った。

「で、何で悪人を殺すんですか？」

「悪人は次から次に悪いことをする。それを止めるためだ。さて・・・準備をするか・・・」

エイジは、何の準備です？と訊いた。

「処刑人の仕事の準備だ」

ルカは携帯電話を取り出し、どこかに電話をかけた。電話がつかない。

「カゲロウか？・・・そうだ私だ。イガラシ・キヨウの動向は把握したか？ああ、今日やる。そいつの今日のスケジュールは？・・・わかった。夜にやる。じゃあな」

ルカは電話を切った。そしてエイジを見た。

「お前も来るか？隣にいるだけでいい。安心しろ。安全だ」

ルカはこの前と同じくビルの屋上にいた。

ライフルに付いているスコープを覗くルカ。その先にはカーテンで中の状況がわからない部屋があった。

三上坂町にある高級ホテルの一室だ。

現在時刻午後5時。着てからもう八時間近く経った。

「ずいぶん待ちますね？ずっと覗いていて疲れませんか？」

「スナイパーというのは忍耐力が必要だ。しつこい様だが、光学迷彩の電源は落とすなよ？落としたら命の保障はない」

「その言葉、五回目ですよ」

「それだけ心配しているんだよ」

「嬉しいですね」

エイジはははっと笑った。

「いつもと違って喋る相手がいるから助かる」

ルカは呟くように言った。

エイジは考えていた。ルカはずっと一人でこんなことをしていたのかと。寂しかったんだろうな。そう思った。だから僕と一緒に連れてきたのだろう。そう結論が出た。

ルカはピルケースから薬を二錠取り出して水と共に飲み込んだ。これで何回目だろう。エイジはその薬を飲むのを見た時、何の薬かと質問した。手の振るえを抑える薬だ。とルカは教えてくれた。

「・・・今回も言葉遊びが来てたら面白い」
「言葉遊び？」

エイジはルカに訊いた。ルカは知り合いのスナイパーだ。と言った。

「そいつは弾丸を弾丸で撃ち落とすっていう神業を軽々とやってくれる嫌な奴だよ」

「敵なんですか？」

ルカは考えた後こう答えた。

「まあ・・・敵だな」

「知り合いなの？」

エイジはさらに訊いていく。

「知り合いつて言っても一回一緒に仕事しただけ。言葉遊びも永遠研究所で生まれ変わったサイボーグだから親戚みたいなものだが・・・」

「その人はどんな経緯で改造されたんですか？」

「詳細は知らないが殺されたって話だ。なんとか復活したらしいが・・・」

エイジはへえー、と言ったが特に驚いたわけではなさそうな顔をした。

「他に言葉遊びについて知っていることは、ダンテって言う外装内装共にゴシツクな喫茶店の常連客だったことと、シナリオライターが本業ってことだけだ」

エイジはそれを聴いた瞬間、押し殺した声で、そうなんですか・・・！？とルカに言った。

「ダンテは僕の伯父さんが経営している店なんですよ……！」

「お前の親戚があのお喫茶店を経営してたのか……」

「まさかこんなところまでつながりがあるなんて……！驚きです……！」

「お前、店には顔出したことはあるか？」

「何度かありますよ」

「じゃあ言葉遊びを見たことあるかもな……」

エイジはそれを聞いてどんな人なんですか？とルカに質問した。

「しぐさは男なんだがやはり女だな。チビだし何より綺麗な顔をしている」

「ルカさんと言葉遊びさん、どっちが綺麗ですか？」

「あ？」

ルカはその時スコープから目を離しエイジを睨んだ。

「どういう意味だ？」

「いや……、どっちが綺麗か興味があつて……」

「私が綺麗じゃないと？確かに私はこれと言って特徴のない顔だ。

だがお前に馬鹿にされるほどではないと自負しているが」

「ルカさんは氷みたいでかつこいいですよ」

「……当たり前だ」

ルカはスコープを再び覗いた。その瞬間、ルカは焦り始めた。スコープの先の部屋のカーテンが開かれていて、そこから男が顔を出しているからだ。

「動きがあつた。ちょっと黙つてろよ？」

エイジは命令通り黙って頷いた。

エイジは時計を見た。六時半。空はまだ少し明るい。

ルカは男の顔をよく確認した。どうやら一般人のようだ。何故一般人がいる？見ている部屋を間違えたはずはない。

視線をホテルの入り口に向けて見た。特に変わった様子はない。

次にルカは裏口を見た。こちらも特に変わった様子はない。

カゲロウに聞くか……。ルカはそう考えて、自分のすぐそばに

置いてあるいつものバックに手をつ突っ込んだ。そして携帯電話を取り出すとルカは電話を誰かに向けた。

「・・・カゲロウ、標的に動きはあったか?・・・そうか。わかった。ずいぶんと心配性な奴だな。ふふつ。・・・必ず殺す。じゃあな」

電話を切ってバックにしまった。

そして、ルカはスコープを覗きながら銃の向きを一気に変えた。ルカの視界には明かりが点いていて、やはりカーテンで中が確認できない部屋が映った。

「どうやら標的が部屋を移ったようだ。まったくビビったじゃねえか・・・」

ルカは返答を待ったがエイジは何も答えなかった。

「どうした?喋れよ?」

「黙ってるって言ったんで・・・」

ルカは、ああ、そうだったな。と言った。

「お前がスナイパーだったら殺していただろうな。ふふつ」

「なんでですか?」

「それだけ私が焦ったってことだ」

「ルカさんでも焦るんですか?」

「当たり前だ。脳みそは人間のまんまだからな。脳みそも機械だったらそんなことも思わなかったと思うが」

クククツ・・・。とルカは自嘲気味に笑った。

「脳みそが機械だったらその人は人間なんですかね?」

「面白い質問だ。人間が人間と証明できるものを言ってみろ」

「・・・心、魂ってところですかね?あと機械には自分から何かをしようとする機能は今のところないと思って・・・。それってなんというんですか?」

「自由意志だ」

「その自由意志が人間を人間と証明しているんじゃないですかね?」

「人間はどうやら自由意志を持って行動しているわけではないらし

い

「え？どういうことですか？」

「たとえばある人間が林檎を見て取ったとしよう。その人間の脳を観測しながら実験した結果、自由意志を司る部分が働く前に神経回路網が先に働くことが判明した。神経回路網が反射的に林檎を取るのだ。人間は人間と証明するのに自由意志は使えない」

「じゃあ心とか魂が人間が人間と証明するんですか？」

「そんな抽象的なものは証明にならない」

「じゃあ何ですか？」

ルカは静かに。と言った。どうやら標的に動きがあったようだ。

ルカはそつとトリガーを引いた。その瞬間、ルカの肩に衝撃が走る。サイレンサーが付いているので音はほとんど確認できなかった。ルカは立ち上がり、エイジに言った。

「人間が人間と証明できるのは積み重ねだ。確か神経回路網は情報の積み重ねによって形成されていく。人間と証明するのはその人間の人生と言っわけだ」

「なるほどお・・・」

帰るぞ。ルカはそう言っつてライフルを分解してバツクの中に入れた。

研究所の使いの車に乗って家に帰るとルカはすぐにシャワーを浴びた。星マークの付いたシャンプーを使用して泡を立てる。

エイジは時計を見ていた。八時半。

ルカは服を着ながら浴室を出てきた。瞬間的にエイジはルカが裸か警戒したが、そうではなかったので安心した。

「今日殺した人の罪って何ですか？」

「殺したではなく処刑と言っつてくれ」

エイジは殺したを処刑したに言い換えてもう一度質問した。

「人を殺したことがある。それだけで十分な罪だ」

「・・・じゃあルカさんも罪人ですね」

「私は数え切れないほどの人間を殺した。

私に免罪符があるとは思っていない。私も十分罪人だ」

そう言ったルカを見て、エイジはルカが素直な感情を持っているんだなあ。と思った。

「さて、夕食にしよう。ついてきな」

「はい！」

こうして今日も一人の罪人が葬られたのだった。

現在時刻六時半。ルカは制服を着て浴室から出た。シャワーを浴びたのだろう。エイジも起床している。だいぶこの生活に慣れてきたようだった。

「右腕の調子が悪いな・・・」

ルカは呟くように言った。

「どうしたんですか？」

机の椅子に座っていたエイジが言った。

「いや、右腕がうまく動かないんだよ」

ルカは震える右手を握ったり開いたりした。そしてじつと右手を見ていた。

「まるでアル中だな。ふふっ……。学校へ行く前にちょっと診てもらおうか・・・」

ルカは笑って言った。

「僕もついて行きますよ」

そう言ったエイジをルカで見て、微笑んで、そうしてくれ。と言った。

「こりゃー交換するしかないねえ」

メンテナンスをいつも担当している研究員がそう言った。

「じゃあ今すぐ交換しろ」

「それが今ストックが切れていてねえ……。この前の実験で使ったんだ。多分神経伝達がうまくいってないと思うんだけどなあ・・・」

「いつになれば新しいのが出来るんだ？」

ルカはため息をついてそう言った。

「学校から帰ってくるまでには用意しておくよ。それまであまり右

腕を使わないようにね」

「絶対に使っちゃまうよ・・・」

「動かすと人工神経の接続部分に悪影響が出るかもしれないよ？」

「だったら接続を解除してくれ。それなら動かさずにすむ」

「わかった」

エイジはその間、心配そうにそれを見ていた。

ルカはエイジと一緒に学校へ向かって歩いていった。ルカの右腕は骨折したかのように三角巾によって固定されていた。

「右腕が動かせないとすると本も読めないな・・・」

「僕がページめくりしますよ」

「ありがとう」

二人は学校の中へ入っていった。

教室に入るとルカの右腕を周囲の生徒が注目した。そしてざわざわと騒ぎ始めた。ルカが負傷をしたのだと思っっているようだ。

「ルカさん。だいぶ注目されてますね？」

「私が誰かにやられたのだと思っっているんだろ。」

別に驚くことじゃないはずだが」

それを見ていたクラスの不良がいた。

昼休み。

ルカとエイジは屋上にいた。

ルカはいつものようにフェンスの外を見ながらタバコを吸っていた。エイジはルカの横に座り弁当を食べていた。季節は秋になって空が高く見えた。

「風が心地よい。日差しも悪くない。最高だ・・・」

「そうですね。暑くなくて快適ですね」

「授業中まで本を読むのを手伝ってもらって悪かったな」

「いえいえ、僕はルカさんの下僕ですから」

ルカはふふつと笑った。そしてこう言った。

「あれは冗談だ。本気にするなよ」

「ええ！？冗談だったんですかあ！？冗談に聞こえませんでしたよ！」

「・・・ホントお前は見ていて面白い」

そう言つて再びルカは笑つた。

「でも今更変えられませんよ・・・」

「何がだ？」

「女王様と下僕の関係」

エイジは真面目な顔でそう言つた。ルカはエイジの顔を見てこう言つた。

「お前がその関係が続けたいのなら好きにしろ」

エイジは数秒考えた後、じゃあ続けさせてもらいます。と言つた。

「ふふつ。本当にお前は面白い・・・」

ルカはそう呟いた。エイジはははつと笑つた。

「そういえばルカさんが昼食を食べているところ見たことないんですけど？」

「ああ、小食であまり食べないんだよ。昼は抜いてる」

「僕の前だからあまり食べてないとかじゃなくて？」

「なんでお前の前だと私が食べるのを控えるんだ？」

「だって女の子は男の子の前だとあまり食べないって昔聞いたことがあつて」

「私は女でお前は男だが、お前を異性と認識したことはないよ」

「なんか男として失格みたいな言い方ですね・・・？」

「そういう意味じゃない。私は男も女も同じだといいたいんだよ。性別でくくられるのがあまり好きじゃないんでな」

「ルカさんは女性としても魅力的ですよ」

「あ？」

ルカはエイジを睨んだ。エイジは弁当を食べ終わりルカを見て微笑んだ。それを見たルカは目をそらした。

「あれ？恥ずかしがつてるんですか？」

「・・・うんなわけあるか」

ルカさんは十分女の子ですよ。そうエイジは言っ立ち上がり、屋上の入り口向かって歩いていった。

「どこ行くんだ？」

ルカがそう聞くと、エイジはトイレですよ。と答えた。そう言っ出て行った。

出て行ってから数分して昼休みの終わりのチャイム鳴った。だがそれを気にもせずルカは片手でタバコに火をつけた。

ルカが教室に戻るといるはずのエイジの姿が見えなかった。まだトイレか？と思い、本を読み始めた。片手で読むからたどたどしいな。とルカは思った。

授業が始まる。だがエイジは帰ってこない。

授業が終わってもエイジは帰ってこなかった。

ルカは何か嫌な予感がした。そして放課後になった。

放課後、ルカはエイジが教室に帰ってくるのをずっと待っていた。その時、教室の扉がガラツと開いた。ルカはエイジかと思って見たがエイジではなかった。名前は忘れたが不良の誰かだった。

ルカは本に視線を移す。足音が近づいてくる。ルカが顔を上げると、不良の誰かがルカの前に立ってた。

「・・・何のようだ？」

「お友達は帰ってこないねえ？」

「それがどうした」

「おやおや・・・心配じゃねえのかよ」

「お前には関係のないことだ。消えろ」

「関係あるんだよ。体育館裏に來い。そこでお友達がお待ちだ」

そう告げて男は去っていった。

ルカは、はあ・・・。とため息をついて、嫌な予感が的中した。と思った。ルカは片手にバツクを手に持って体育館裏に向かった。

ルカが体育館裏に着くとそこには十数人の男がエイジに殴る蹴るなどの暴行を加えていた。そのうちの何人かがルカに気づく。

「やっとお出ました……。おつと動くなよ？」

これ以上こいつに怪我させたくなければなあ」

ルカは相手の人数を数えた。数は十三人と判明した。

「やっとお前にお返しができるぜえ……」

男たちの数人はバットを手に持っていた。困ったなあ。とルカは思った。なぜならば今右腕は使えないからだ。左腕しかない。さらにエイジが人質にとられている。

男たちが近づいてくる。そしてルカにバットを振り上げ、落とした。

ガツン。

重い音が響いた。ルカは片膝が地面につきそうになった。

集団でルカはバットで殴られつつあった。

「ルカ……。さ……。ん」

エイジは片目でルカが殴られ続けるのを見続けた。

ルカは徹底的にやられている途中倒れた。それから数十分殴られ続け、男たちは去っていった。エイジがふらふらと立ち上がり、ルカの名前を呟きながらルカの元へ向かった。

「ルカさん！！」

「なんだ？」

ルカは何事もなかったかのように立ち上がった。

「あ……。ルカさん、大丈夫なんですか……？」

「当たり前だ。私の身体は強化セラミックの骨格と強化人工筋肉で守られている。あのぐらいたいしたことない。やられた振りだ」

エイジはぽかんとした。

「それよりお前こそ大丈夫か？ けっこうやられていたようだったが」「何とか大丈夫です……」

ルカはそうか。と言った。

「悪かったな、巻き込んでしまつて」

「気にしないでください。僕のほうこそすいません。捕まっちゃつたりして」

「帰つたら研究所で傷を見てもらえ」

そう言つてルカは携帯電話を取り出した。改造とかされませんよねえ……？そうエイジは言ったが、ルカは無視して電話をかけた。「……母さん、私だ。学校の前まで迎えをよこして欲しい。エイジがやられた。……そうだ。よろしく」

電話を切つたルカは、痛いところはあるか？とエイジに訊いた。エイジは全身。と答えた。だろつな。とルカは笑つて言った。

家に帰つてエイジはすぐに研究室で治療を受けた。

ルカはボディの状態を調べるために隣で診察を受けていた。エイジは思った。不幸中の幸いというのだろうか？エイジに大きな怪我はなかった。その代わり、ルカの身体には無数のアザが残っていた。所々出血もしていた。

僕のせいでルカさんはあんな大怪我を……。僕さえしつかりしていれば……。ルカに対して悪い気持ちで一杯だった。

「だいぶやられたねえ……」

ルカを診察していた研究員はそう言った。

「ま、数日すれば人工皮膚も傷を塞いでくれるさ。さて、右腕できてるから交換するよ？」

「いつでもいいぜ……」

「明日お礼しに行くんでしょ？クククツ……。私も見に行きたいぐらい楽しみだあ。ルカちゃんという天使に傷を負わせたんだからなあ……」

そう言つて研究員はるかの新しい右腕を持つてきた。そしてルカと共に別の部屋に移動した。エイジも部屋に戻ろうとした。

「エイジくん？」

その時研究室の扉が開き、一人の若い女性が出てきた。その女性が自己紹介を始めた。

「はじめまして、私はクドウ・ナナエ。ルカの母です」

「あなたがルカさんのお母さんですか。僕はタニグチ・エイジです。よろしく願います・・・」

「仕事が忙しくてなかなか会えなくてごめんね。色々立て込んでるのよ」

「ずいぶんとお若いですね」

「ふふっ、アリガト。今年で私は63歳よ」

え！？

エイジは驚いた。

「私もルカと同じように身体を人工物に換えてあるの。実はもうおばあさんなの」

「そうだったんですか・・・」

「あなたの身体も私やルカみたいにする？」

ナナエは少女のように無邪気な笑顔で言った。63歳の笑顔に見えなかった。

「いえ、僕はこの身体が好きですから大丈夫です」

「そう・・・まあこれからルカと仲良くしてあげてね」

ナナエは微笑んでそう言い、部屋を出て行った。

ルカの部屋に向かう廊下を歩いていると二人の黒服の男が部屋のドアの前で立っていた。二人はエイジに気がつく和小さいほうの男が近づいてきた。

「やあ、こんばんわエイジくん。身体は大丈夫かい？」

「あ、はい。なんとか・・・」

エイジは知らない異質な男に体の心配をされて気味が悪かった。

「僕はカゲロウ。隣の大男はコンドウだよ。よろしくね」

そう言って二人は歩いて去って行った。なんだったんだ？エイジはそう思ったが、とにかく今はシャワーを浴びたかったので考える

のをやめた。

ドアの鍵を開けて、浴室で服を脱いでシャワーを浴びた。ルカに強制された番号のふられたエイジ専用のシャンプーを使って髪を洗う。髪も身体も洗い終わり、バスタオルで身体を拭いて服を着て浴室を出た。

部屋にはルカが帰ってきていた。ルカは机の椅子に座ってパソコンを操作していた。エイジが見た限りでは右腕の交換は済んだようだった。

「ルカさん、パソコンで何やってんですか？」

「ハッキング」

「は、ハッキング!? 何でまたそんな犯罪を! 捕まっちゃいますよ!」

「捕まらんよ。私はこれでも通でな、学校内のサーバーをちよつと覗いているだけだ」

エイジはきよとんとした。そしてルカにこう訊いた。

「何で学校にハッキングしてるんですか？」

「今日お前に殴った奴らのクラスと学園を調べてんだよ。ありがとう
く思え」

「調べてどうするんです?」

「フルボッコ」

ルカは今までになく眼を輝かせてそう言った。エイジは血の気が引いた。ルカさんが本気になったらあの人たち殺されちゃうよ。とエイジは思った。

「あの、殺すんですか」

「いや、再起不能にしてやる。殺しやしない」

再起不能!? 単位がわからないよ! とエイジは思った。

「さ、再起不能ってどのくらいのことするんですか?」

「そうだなあ・・・、じわじわと全身の骨を砕いてやるよ。ふふっ・・・」

「そんな事しなくてもいいんじゃないですか・・・?」

「何故だ？お前は殴られて蹴られてムカつかないのか？」

「そりゃ腹立ちますけど、そこまでしなくても・・・」

ルカはエイジの方を向いて、じゃあどのくらいまでならいいんだ？と訊いた。

「そうですね・・・」

たとえば二度としないように注意すればいいんじゃないですか？

他にはなにか罰ゲームみたいなことするとか・・・」

ルカはそれを聞いて何か考え込んでいた。数秒経って、いいこと思いついた・・・と呟いた。ルカの表情には冷酷な微笑みが・・・

「な、何をするつもりで？」

「内緒。ふふふ・・・。確かあれは研究室にあったはずだ・・・」

次の日。二人は普通に登校した。腕も換えたのでルカは三角巾はしていない。ルカが教室に入ると昨日ルカを体育館裏に來いと言った不良がすでにいた。その不良はルカが教室に入るのを見た瞬間顔が青ざめていった。

ルカは不良に近づく。そしてこう言った。

「二度とあんなことするなよ？わかったな？」

不良は首を大きさに振って頷いた。

「それとこれは昨日、私の下僕に暴行した罰だ・・・」

ルカはバツクに手をつ込んだ。不良は震え上がる。バツクから黒くてちよつと長い機械のようなものが取り出された。不良は殺されると思つて目を見張つた。ブウウウウウウンという音が不良の耳に入る。ルカが不敵に笑う。

「罰ゲーム」

ルカはそう言つと不良の首を前から左手で力強く掴み、手に持った機械を不良の頭に当てた。

バリバリバリバリッ！

不良は悲鳴を上げる。

「なにビビってんだよ？バリカンだよ。テメエの頭を丸くしてやるよ」

そして不良の髪の毛は丸坊主になった。ルカは一人目終了と宣言した。

「なかなか似合ってるじゃないか・・・。ふふふ・・・」

不良は全身の力が抜けて動けなかった。ルカは次行くぞ！とエイジに言い、教室を出て行った。

そして次の教室でも、そのさらに次の教室でもバリカンで丸坊主の刑を執行して行き、全員残らず丸坊主になった。そしてルカとエイジは授業を無視して屋上に行った。

「いやあ愉快愉快・・・！」

「暴力で解決するよりやっぱり罰ゲームぐらいが丁度いいんですよ」ルカは、そうだな。と言ってタバコに火をつけた。

「ちよつとお前、私の前にピシツと立て」

ルカは隣に座っているエイジに言った。立ち上がるエイジ。

「何ですか、いきなり？」

「目を瞑れ」

「だから何するんですかあ？」

「いいから瞑れといっただろうが」

わかりました。と言ってエイジは目を瞑った。

「これは新しい手段を覚えてくれたお前へお礼だ」

そしてルカはエイジにキスをした。エイジはびっくりして目を開けた。

唇と唇が離れる。エイジは硬直していた。

それを見たルカはふふつと笑って再びタバコを吸い始めた。

その日エイジは寝るまでルカとキスしたことが頭から離れなかった。

ルカとエイジは授業をサボって屋上で紙飛行機を作っていた。

ルカが暇だ暇だと何度も言うのでエイジが紙飛行機を作りまじょうと提案したからだ。

紙飛行機を折りながら「どこの青春ドラマだよ」と言っつてルカは笑った。

「屋上で紙飛行機を折るなんてホント青春ですねぇ……」

「そのイメージをエイジが何処で拾ったのか知らないが、陳腐な事この上ない」

「そうですね？」

「まったくもつて、古臭い」

そう言っつてルカは紙飛行機を折り終えた。

「こいつは青春ドラマ一号だ。適当な作りだが、青春ドラマよろしくダラダラ長いこと飛ぶであろう」

ルカさんは何か青春に恨みでもあるのかなあ？ とエイジは思ったが口には出さなかつた。

「こいつは絶対に飛ばない」

「何でそんなネガティブなことを言っつんです？」
「願掛けだ」

ルカは風が止むのを待っつて、青春ドラマ一号を空に放つた。

青春ドラマ一号は、ルカの手を離れると同時にカクンと急降下。そのまま墜落した。

「まあ…… こんなもんだらう」

ルカは墜落した青春ドラマ一号を眺めながら「暇だ」と口にした。

その後、ルカは暇だ退屈だと何度も口にして、どこかへ行ってしまうた。

屋上に残されたエイジは、ルカが戻ってくるのを待ったのだが、放課後になってもルカが戻ってくることは無かった。

このまま待っていてもしょうがないと考えて、エイジは帰ることにした。

一人で帰るのは久しぶりだなあ。とエイジは思っただけで校門を出ると、見慣れた黒服の二人が目に入る。

カゲロウとコンドウだった。

「今からお帰りかい？」

カゲロウの言葉にエイジは曖昧に答えた。

「このまま研究所に戻るのなら、ボクたちと帰らないかい？」

エイジはルカから聞いたカゲロウの話を思い出す。

カゲロウは金の為ならなんでもするらしく、逆に言えば金が絡まないと何もしてくれない男だとルカは言っていた。

そう思い出して、じゃあ何でカゲロウがボクの前にいるのだろうとエイジは思った。

「ボク、お金持ってないですよ？」

エイジがそう言うと、カゲロウはニヤリと笑った。そんな事は知っていると聞いたげな嫌な笑みだった。

「今日は気分がとてもいいんだ。だからたまには善意の押し売りしようかなと思ったの。だから、君は今から僕たちと帰るんだ。わかっただかい？」

「嫌ですよ」

「なんでだい？」

「怖いですもん」

エイジがそう言うとカゲロウは「なるほど」と呟く。

「ボク以上に優しい男はいないと思うのだが…… まあいい。今日

は気分がとてもいい」

そう言ってカゲロウは隣に立つコンドウを思いつきり蹴った。

「やはり今日は気分がいい。とても、とても。善意の押し売りをすぐくしたい気分だ。だけどあれだよなあ…… 君が嫌だというのだからしようがないよなあ…… ああ、君はボクを怖く思っていたのだったね。ではこういうのはやめたほうがいいんだよね？」

カゲロウは再びコンドウを蹴る。

「こういうのは、駄目なんだよねエイジくん。こういうことするかボクは怖がられてしまうのかな？ ボクは怖くないよ？ むしろ可愛い方だよ？ そして優しい男だよ？ ああ、なんでわかってもらえないのだろう。ボクは怖くなんかないよ。ほら、コンドウも笑っているだろう？」

エイジはコンドウを見た。彼に表情はなかった。

「ね？ コンドウも楽しいよね？ 蹴られて楽しいよね？ なあコンドウ？」

コンドウは無言で頷く。

「じゃあもつと楽しくなるうか。コンドウ、しゃがめ」

コンドウが両膝を地面につける。コンドウの顔は丁度カゲロウの胸元の高さになった。

「エイジくん。ボクはとても気分がよい」

そう言ってコンドウの顔を殴った。

「とても気分がよい」

もう一度殴る。

「だけど、なんか気分が悪くなってきた。なんでだろう？」
殴る。

「なんでだろうね？ なんで気分が悪くなるんだろうね？ エイジくん、もしわかるのなら教えて欲しいな。コンドウ、飴を舐めたくないか？」

カゲロウはポケットからキャンディーを取り出して、コンドウの口にねじりこむ。

「そんな嬉しそうな顔するなよコンドウ。もっと沢山舐めたいよね？」

そう言っただけでキャンディーを次から次へコンドウの口に入れ込んでいく。

カゲロウはコンドウの頬が膨らむほどキャンディーを入れて「とても甘いだろうなあ」と呟いた。

コンドウはその言葉にゆっくりと頷く。

「でもこんなに沢山舐めるなんてできないよね。ごめんよコンドウくん。ボクはどうしたらいいのかな？」

コンドウは自分の頬を指差し、拳を握って頬に当てる。

「そうか。殴ってキャンディーを砕くんだね？ わかった。これも人助けだ。全力で殴ろう。ああ！ 手が痛い！ 何でだろう？ 痛くてコンドウくんを助けられそうにない。どうしたらいいんだ！ あ、エイジくん。丁度いいところにいた。ボクの代わりに助けてやってくれないか？」

カゲロウはキャンディーをエイジの手に握らす。

「それを握ってコンドウの頬を横から思いっきり殴ってみよう。殴った後そのキャンディーを舐めるんだ。きっと気分が良くなつて僕たちと一緒に帰りたいと思うはずだ。やってみるだけ損はないはずだ。殴った後に舐めるキャンディーはとっても甘いよ？」

「なんでボクがやらなくてはいけなんでしょうか……？」

「コンドウを助けたいと思わないのかい？」

コンドウさんの口内には頬が膨れ上がるほど沢山の飴玉が入っている。今コンドウさんを殴ったら飴玉はどうなるのだろうか？

エイジは口内で砕ける飴玉のことを想像して、そこで自分の足が震えていることに気づいた。

「もし嫌ならいいんだ。君が出来ないのなら僕がやる。君はボクがコンドウを殴るのを飴玉を舐めながら眺めていればいい。ボクはそういう奴一番大嫌いだけどね」

「あの、ボクはどうすればいいんですか……？」

「ボクは助けて欲しいと言っただけだ。君が出来ないのならしょうがない」

「殴らないで終わる事はできないのですか？ 何でもしますから……」

エイジがそう言ったのを聞いて、カゲロウはニヤリと笑った。

「今、何でもするって言ったね？ エイジくん。確かにそう言ったね？」

言いました。とエイジは答えた。

「ならば一緒に帰ろう。車の用意は出来ている。さあ行こうか」
そう言ってカゲロウはコンドウを殴った。

*

コンドウは口から血を垂らしながら、運転している。

エイジは後部座席に座らされた。隣にはカゲロウが座っている。

「これでもボクとコンドウは演技派なんだよ」

カゲロウはそう言って笑う。

「あれは演技。真正正銘の演技だ。迫真の演技だっただろう？」

エイジは演技には見えないと思ったのだが、頷くしか出来なかった。

「いやあ、素晴らしいで賞受賞間違いなしだねえ」

「そうですね……」

エイジの言葉を聞いてカゲロウは舌を打った。

「君を見ていると昔のボクを思い出して気分が悪くなる……」

カゲロウはそう言って次の言葉を出すまでに長い時間が経った。

「さて、エイジくん。ここからが本題だけど…… 何か悩み事はな
いかい？ なんでもいいんだ。あるのなら言ってくれ」

「あの…… ボクは本当にお金ないですから……」

「大丈夫。もう貰っているから」

カゲロウの言葉の意味をエイジは考えたのだが、さっぱりわからなかった。

「何か悩み事、ないかい？」

エイジはどうにでもなれと、今日のルカとの事を話した。

「それはそれは……なるほど。そういうことか」

カゲロウはニヤリと笑う。

「あれえ〜？　なんだこれは〜？」

カゲロウは素っ頓狂な声を上げて、ポケットに手を突っ込む。

取り出されたのは、二枚の紙切れだった。

「なんだこれはー？　遊園地の無料招待券のようだぞ〜？　明日までだつてさー。うーん……　コンドウくん。明日行ってみようか？」

「明日、予定がある。駄目」

「そうかー。ならしかたがないな〜。明日行けないのならボクはい

いや。ん？　丁度いいところにエイジくんがいるぞ？　そうだ。こ

のチケットは君が使うといい」

カゲロウはエイジにチケットを握らせる。

「よし確かに君に渡したよ。暇なら行ってみるといい。二枚あるか

ら誰かと一緒に行くのが一番いいだろう」

「あの……　これはどういうことなんでしょうか？」

カゲロウは偶然だよと言って笑う。

「研究所についたよ。さっさと降りてくれ」

扉が自動で開き、カゲロウに車から押し出された。

エイジが降ろされると、窓が開かれカゲロウが顔を出す。

「頑張れ少年。今日の事はルカには秘密だよ」

カゲロウはそう言ってコンドウに車を発進させるよう指示を出し

た。

エイジは状況が飲み込めないまま、研究所に入った。

エイジはルカの部屋にすぐさま向かった。

ルカの部屋の前に立ち、ノックをする。

ノックをして少し間を置いた後、扉が開かれた。開けたのはルカだった。

「遅かったな？」

エイジはカゲロウとの事を口に出しそうになり、慌てて野暮用ですと言った。

「野暮用？ 何をしていた？」

ルカは不機嫌そうに首を鳴らす。

エイジはどうするべきか迷った。迷った末、カゲロウを真似する事にした。

「あれー、こんなところに何かあるぞー？」

ルカは眉間にシワを寄せてエイジを睨む。エイジは慌ててポケットからチケット出した。

「この遊園地のチケット、明日までらしいです。そこでルカさん、一緒に行きませんか？」

「お前は私の親父か？」

「え？」

「まったく、ビックリさせるなよ。死んだ親父ソツクリだった」

「はあ……」

「明日だな。是非行こう。遊園地行ったことがないんだよ」
ルカはそこでエイジを部屋に入れた。

6 (前書き)

壊れました。

*
今、ルカの目の前には雑誌や広告でしか見ることしか出来なかつた遊園地がある。

ジェットコースターにお化け屋敷。

コーヒークップ、観覧車、メリーゴーラウンド。

全てルカの想像以上だった。

「これ、夢じゃないよな？」

ルカはエイジに尋ねた。

「夢ではないんだけど、夢みたいな世界というか、なんとというか……
とりあえず現実だと思えますよ？」

エイジのまどろっこしい返答を聞いて、これは夢じゃないのだとルカは確信した。

「何から乗ります？ ボク個人としては絶叫系を断然お勧めしますが……」

絶叫なんかしたくない。いや、したい。

沢山の素敵なものに囲まれて絶叫したい！

「エイジ！ 早く行くぞ！」

「何か乗りたいものがあるんですか？」

分からん！ ルカは叫んだ。

「何があるか分からん！ だから全部見たい！」

*

今、私が思うことは、本当に私が考えている事なのだろうか？
私は本当にこの場所に来たかったのか？

私は。

私は、本当にそう思ったのか？

私は心からそう思ったのか？

考えたくない。

消える。

消えてくれ。

なんでこんな事を考えてしまうの？

私は。

私は……

もう嫌です。お願いします。助けてください。

こんな事を考えてしまう私を助けてください。

どうしたら、どうしたら私は……

私は。

私は、助けて欲しい。

ああ、ヤダヤダヤダヤダ！

もういい。誰も助けてくれないのなら、私が助けるしかない。

私を助ける為には、悪い人殺さないで。

悪い人は殺さないと駄目だ。幸せが減ってしまう。

そんな事は許さない。絶対に許さない。

私がこうなったのも全部アイツのせいだ。

殺してやる。

まるごと全部殺してやる。

殺してやる。

*

ルカが立ち止まったのを見て、エイジはどうしたのかな？ と思
った。

ルカは何も言わず、エイジが声を掛けても視線をずらす事はなか

った。

エイジはルカの視線の先に何かあるのかと探したのだが、ルカが何を見ているのか特定する事は出来なかった。

何を考えているのだろうか？

ルカが何を考えているのかエイジは気になった。

ルカさんの考えている事が分ければ、ボクはもつとルカさんの力になれる。

「死んでしまえ」

ルカはポツリとそう言った。誰に対して言ったのかエイジには分からなかった。

ルカは、エイジの手を離し、一人で歩き始めた。

エイジは、今何が起きているのか分からなかった。

*

ルカは、ありがとう。と言った。

その後、さよならと言った。

何故さよならなのですか？ とエイジは尋ねると、ルカは「思い出したから、サヨナラしなければならぬ」と口にした。

「何を思い出したのですか？」

「私が七番目だという意味」

そう言ってルカは走った。

エイジは後を追おうとするのだが、追いつく事は出来なかった。

*

「遊園地どうだった？」

エイジは電車に揺られていると隣に座った人からそう声を掛けられた。エイジは顔を上げて見てみるとカゲロウがいた。

カゲロウに、なんているんですか。とエイジは言いたくなかったのだが、昨日のことが頭に浮かんでやめにし、代わりにいつも一緒にいるはずのコンドウさんのことを尋ねる事にした。

「コンドウさんはどうしたんですか？」

「彼は精密検査中だよ。そんなことよりエイジくん。遊園地は楽しかったかい？」

エイジはよくわかりません。と答えて、別れ際のルカの言葉の意味を考えた。

七番目というルカの言葉の意味を考えて、エイジの中で思い浮かぶのは彼女の背中に書かれた数字。

彼女は何の七番目なのだろうか？ それがサヨナラする理由と繋がるのだろうか？

「何故暗い顔をしているのかな？」

カゲロウはニヤけた顔つきでエイジに言った。

エイジは自分の頬に手を当てて、「暗い顔ですか？」とカゲロウに訊いた。カゲロウは「暗い顔、もしくは悩んでいる顔だね」と言っただけで自分の言葉に納得するように深く頷く。

カゲロウさんはルカが七番目という言葉の意味を知っているのだろうか？ ふとエイジは思った。

「何か悩み事があるのなら、ボクが相談に乗るよ？」

カゲロウのその言葉で、再び昨日の出来事がエイジの頭に浮かぶ。言うべきかエイジは迷ったのだが、七番目という言葉の意味をカゲロウさんは知っているのだろうかと思っただけで訊くことにした。

「カゲロウさん。ルカが七番目ってどういう意味ですか？」

カゲロウは、その質問を待っていたよう見えた。

「そのままの意味だよ」

そう言つてカゲロウは笑う。

エイジにはその言葉の意味が分からなかった。

「ザックリと説明すると、ルカは七番目に生まれたクローン人間」

「何故そんな事を……」

「オリジナルの持つ特異能力の量産…… だつたかな。オリジナルはハイアナライザという相手の思考を読み取る力を持っていた」

ハイアナライザ。

ルカがハイアナライザとは悪意を感知する能力と言っていたのをエイジは思い出す。

「ハイアナライザの量産。そんな事を研究所の連中が始めた理由をボクは知らない。ボクが分かるのは、ルカは七番目の複製体で、最後の欠陥品と呼ばれていること」

「最後の欠陥品ってどういうことですか……？」

「永遠研究所は、ハイアナライザの複製に失敗したつて事。複製体たちは能力を受け継ぐ事が出来ずに破棄された」

その話を聞いていて、養子としてルカは研究所に引き取られたはずでは？ とエイジは思い出す。

「ちよつと待つてください。ルカさんは養子でナナエさんのもとに来たはずじゃ……」

「それは本当の事。彼女は養子として研究所に引き取られた。それまでは普通に暮らしていたよ」

「どういうことですか？ ルカは研究所で生まれたのに研究所に引き取られたつて意味が分かりません」

「彼女が廃棄されることが決まった時、彼女を連れて一人の研究員が逃げた…… と言えはわかるかな？ 何故廃棄される事になったのかと言えば、七番目のルカも能力を持っていなかったんだ。まあ結局、能力を発現させて、生まれた研究所に戻ったわけだけ……」

「ルカさんはその事を知っているのですか？」

「知っている事もあれば、知らない事もある…… と言う感じかな。さて、エイジくん。この話を聞いて、君はどうしたい？」

突然の質問にエイジは言葉に詰まる。

「ルカを守るのがボクの役目。だから、ルカを脅かそうとする者がいるのなら殺す。ルカの前に大きな障害があるのならボクは全力で取り除く。でもボクにも出来ないものがある。それは彼女の悩みを解決すること。これはボクのお願いなんだけど、君がルカの力になりたいと思うなら全力で助けてあげてほしい。変な子に見えるかもしれないけど、本当は素直でいい子なんだ」

エイジはカゲロウの言葉にどう返していいものか悩んでいると、カゲロウはボクの大切な人だからね。と言った。

「これから少し厄介な事になる。終わりが近づいてきているんだ。だから君にこれを渡しておく」

カゲロウはエイジにリボンでラッピングされた小さな箱を渡した。

「これがあれば、君は多分大丈夫。中は見ちゃ駄目だよ？」

「一体なにが起きているんですか？」

カゲロウはニヤリと笑って、終わりの始まり。と言った。

*

ここから世界は豹変する。

予兆もなく、ボクの見ていた世界がグニヤリと歪んだ。

これは本来あつてはならないことなのだけど、それがこの世界の決まりだったのならボクは納得する以外ない。

この世界は***だったのだから。

7 (前書き)

3 / 9 誤字訂正。文章付け足し。

私は息を吐いて息を止める。

目を閉じて、目蓋の裏の暗い世界に意識を移す。

ここは文字の世界。

私が忘れていた虚構の世界。

もう誰も私に隠し事は出来ない。全てのものが文字として表される世界。

誰が何を考えているのか、私はこの眼で見ることが出来る。

全ては狂った夢から覚める為に。

さよなら。

私の言葉は形となって、目の前で漂った。暗い世界に真っ白な『さよなら』という文字。私は、その文字の感触を指先で確かめてから砕いた。さよならの文字は砕け散り、破片は種となって別の言葉を浮かび上がらせる。さよならから生まれたのは七番目の夢を砕く言葉。

私はその言葉を読み上げる。

「私の腕は、黒く長く、硬質。この黒曜石の腕を空にかざせば、まるで塔のよう。太陽を掴める私の腕。私の足は白蟻。つややかで精巧。本物以上に本物。前に出せば鈴の音が鳴る。この世界の道を教えてくれる私の足。腕と足を繋ぐ胴体は硝子のケース。中に詰まっているのは記憶とか思い出とか。それらを文字の外套で覆って、綺麗にラッピング。誰にもわかって欲しくない私の心。私はこの世界に一人。だから私の目玉は一つ。左目を指で取り除く。残った瞳孔に歯を埋め込んで口を作る。口が二つあれば一人でも寂しくない」私の身体は変化していく。私という形が崩れて、七番目として再構築されていく。

一番私らしい姿となった。

「今から私は七番目を再開する。全ては幸せの為に」
私が私である理由。

私は大きく息を吸って、新たな身体に酸素を供給。
私は目を開き、現実と呼ばれる世界に初めましてと挨拶を。
私は好きでした。だけど、嫌いになりました。だから、さよなら。

私は目を閉じ文字の世界に帰り今から全てを壊す為に両手を高く高く上げた。狙いを定め、大地に叩きつける。

*

遠くで雷が鳴った気がした。ボクは車窓の外を見るが、空には雲ひとつない。あるのは燃えるような夕焼け空。

今の音は気のせいかと思って、ボクはカゲロウに終わりの始まりについて尋ねた。

「終わりの始まりとはなんですか？」

カゲロウは深く息を吐いて、頬を掻いた。ボクの質問に呆れているようだった。

「今の音が聞こえなかったかい？ あれが終わりの始まりなんだけど」

カゲロウがそう言葉にした時、また雷の音が聞こえた。

「これは雷じゃないんですか？」

「違うよ。そんな生易しいものじゃない」

じゃあこの音はなんですか？ とボクが訊くと、カゲロウは「世界が壊れる音だよ」と言った。

その時、ボクの身体が宙に浮いた。

*

私は両手を見ると、そこには潰れた文字がへばり付いていた。これで後には退けない。そう思った時、左目の口が喋りだした。「ナナちゃん沢山人を潰したけど、これに何の意味があるの？ 私にはわからないよ」

こうしないと、夢から覚めることができないんだ。

「なんで覚ます必要があるの？」

この世界は夢で、幻だからだよ。

「幻を見てはいけないの？」

見ては駄目。本当のことを忘れてしまうから。

「なるほどねー」

左目の口はそう言って黙った。

アイツが見る夢からみんなを目覚めさせないと。

私はもう一度両手を高く上げて大地に叩きつけた。

*

ボクの身体は座席から宙に浮いた。他の人もボクと同じように浮いていた。この光景はさながら無重力体験会と言ったところだろうか？

「エイジくん。さよならだ」

一人座席から浮きあがることなく、カゲロウはそう言った。

「君と話せてよかったよ。これもルカの見る夢のお陰かな？」

カゲロウはゆっくりと目を閉じた。

「こんなに緊張するのは久々だよ。やっぱり慣れないものだね。死ぬってのは」

カゲロウはそう言って満足げに深く息を吐く。その時ボクはカゲロウの身体が透けていることに気づいた。

「じゃあね」

カゲロウの姿は光の粒となって弾けた。
三度目の『世界の壊れる音』が聞こえた時、ボクの意識は一度途切れた。

*

私の鼻先で小さな文字が現れた。
小さな文字はその身に宿す意味に似合わず、眩しく輝いている。
私は手を止めて、その文字が私の前に現れた意味を考えた。

ここは夢砕きの夢の中。なのに、この文字は夢砕きである私を認識している。

私を認識できるのならば、これはアイツの言葉かもしれない。
私はその文字を握ったその瞬間、左目の口が「駄目」と言った。
何が駄目のなのか私にはわからない。

それに、駄目と言われてもすでに握り潰してしまった。温かくて
又ルヌルした感触が手の中で広がる。

見れば真っ赤な色。

私はジッと手の平の赤を見た。

*

ボクが目を開けると見覚えのある天井があった。ここが永遠研究所だとわかった。

電車に乗っていたはずなのに、いつの間にボクは帰ってきたのだらうと思った。

ボクは起き上がろうとしたのだが、身体が言う事を聞かない。手にも足にも感覚がない。痺れてしまったのだらうか？

視界にクドウ・ナナエが覗き込むように入ってきた。

クドウ・ナナエはボクの目を見つめて、一度微笑み、おはよう。

と言った。

「まだ手足がないから動かないで」

状況が飲み込めない僕が言うと、貴方の身体はまだ出来てないわ。とクドウ・ナナエは言った。

なるほど。とボクは思った。

「目を閉じて、もう一度お眠りなさい。貴方はまだ目覚めては駄目なの」

ボクは言われたとおり、目を閉じて眠りについた。

*

手の中の赤が泡立ち、気泡が生まれた。それが弾けて言葉が生まれる。私は左目の口が勝手に朗読を始める。

「君がル力を殺したくなるのはわかるよ。ル力の夢の為だけに造られたのに、力がなかったが為にル力になれなかったのだから」

左目の口はそう読んだ。黙らせようと私は右目を閉じた。だけど、左目の口は読み続ける。

「ル力を殺せば永遠は消えてしまう。わかるだろう？ ル力の夢の中で死から逃れた者がいることを。君がル力を殺せば、肉体のあるものは目覚める。けどすでに肉体が滅びた者はどうするんだい？

死者に対して酷い仕打ちだと君は思わないのかな？ 目を開けるんだ七番目のル力」

私は目を開け、手の平の赤を見る。嫌な赤色だ。

「ボクは君のことが好きだよ。哀れみとかそういう感情抜きで好きだ。君はボクの事が嫌いだと知っているけど、それでも君が好き」

赤色は手の平から浮かび上がり、真っ赤な球体となった。

「ボクは、まだ君を見ていたいな」

*

ボクは再び眠りについた。

目を開けると夕焼けを背に二つの塔が見えた。

ボクは第四中学校の屋上に立っていた。街を見渡すと人の気配がなかった。

この世界は夢なのだと自分に言い聞かせる。そうしないとその事を忘れてしまいそうになる。

二つの塔を眺めたあと、カゲロウから渡された小箱を空に掲げた。なんとなく、何か起こりそうな気がした。

でも、何も変わらなかった。

急に恥ずかしくなつて、ボクは小箱をポケットに捻りこみ、二つの塔の元へと向かった。

そこにルカさんがいるような気がしたからだ。

第四中学校から外に出て、ボクは走った。

走りながら、ルカさんに何を言えばいいのか考えた。わからない。

ボクはルカさんのことを詳しく知らない。

だけど、何か話したい。

沢山話して、もっと彼女のことを知りたい。

それだけでいい。それがボクのしたいことだ。

ルカさんはボクを中心だ。それがすべてだ。

*

私は夢砕きの身体から追い出された。

追い出したのは、左目の口なのか、夢砕きである七番目なのか

からない。

私は両手を空に掲げた夢砕きを見上げる。

両手の少し先には、真つ赤な球体があった。

「すこし昔話をしようか」

夢砕きの左目の口が言った。

「何年も何十年も昔。もしかしたら何百年も前かもしれない。永遠研究所は永遠を完成させた。死を回避する為の造られた永遠だ。その永遠の名はルカという。中核を担う少女の名から付けられた」

それがこの世界の名前。と夢砕きは言った。

「夢の中で生き永らえるという発想は、クドウナナエらしいかな。夢を見ている間はこれが夢だと気づけない。では、死ぬ直前に夢を見れば死んだことにも気づけないのでは？　なんて考えるのはあの人ぐらいだよ」

そこで夢砕きはため息をついた。

「でも、夢は個人的なもので、複数の人間で共有するものではない。本来だったらナナエの提案をボクは却下していた。でもしなかった。何故ならボクには不思議な力を持った娘がいたから」

それがルカだよ。と夢砕きは言った。

「ルカは人の思考が読めた。その事は研究所の人間なら皆知っていた。でも思考を読めても永遠とはなんら関係ないと皆笑って言っていたしボクも思っていた。でもナナエの提案を聞いた時、ルカの力を使えばもしかしたらと思ってしまうた。ルカの力で永遠がこの手に入るのならと考えてしまった。最低だろう？　でも、それがボクだ。そこからは上手く事が進んだ。思考が読めるのなら、逆に思考を読ませることが出来るかもしれない。コペルニクスの逆転の発想だよ。あとはルカの夢が永遠に続けば良いだけ。ルカは肉体を失い、代わりに機械の生命維持装置を与えられた。それでもボクはルカの夢が消えるのを恐れた。だからルカが死んだ時のスペアとして君を造った」

夢砕きは私を見て、最低だと言ってくれと言った。私が黙り続け

ると、夢砕きは右目を閉じて、話を続けた。

「スピアとして生まれた君達は、ルカのような強い力を持っていなかったのだけど、ルカの負担を軽減する為に君達も夢見ることとなった。そうして今、君はルカを殺してこの夢を覚まそうとしている。君達もこの夢の中核を担っているのなら、ルカを殺す事も可能。だけど……」

それだけはやめてくれ。と夢砕きが言った。

「ルカを殺さないでくれ…… あの子に自分が死んでいることに気付かせたくないんだよ……」

*

心臓がうるさい。呼吸が苦しい。足に力が入らない。それでも走り続けた。

でもバランスを崩して呆気なくコンクリートの地面に倒れる。もつと体育頑張っていたればよかったと今になって後悔する。

ボクはガクガクと笑っている足を叩いて気合を入れ立ち上がる。走りたいのに、ルカに早く会いたいのに。身体が言う事を聞かない。

塔はもうすぐだというのに……

ボクは地面を蹴って走ろうとしたが、また倒れてしまった。

もう一度だ。

こんなところでモタついてられないのに……！

畜生！

「エイジ、乗れ」

突然掛けられた声に驚いて見上げるとコンドウさんがいた。立ち上がれないボクはコンドウさんに抱えられて車の後部座席に乗せられた。

「なんでコンドウさんが……」

「エイジ、ルカのところに来てけ。そうカゲロウが言った。だから連れてく」

コンドウは車を急発進させる。

「エイジ、キミ、良い人。だからルカ、キミが好き。カゲロウ、キミが好き」

コンドウは片言な言葉でそう言った。

「急ぐ。シートベルト、締めて」

*

それから夢砕きは黙り続けた。

夢砕きはルカを殺さないでと言った。でも私は止めるつもりはない。

「お前が誰かわからない。だけど、私はルカを絶対に殺す。アイツが永遠を維持するからこの世界にも悪人が生まれた。だから私は元凶を壊す」

夢砕きは黙り続けた。

「何とか言えよ。さっきまでそれはもう饒舌に語っていたじゃないか」

私は何を言おうと夢砕きは黙っていた。

私はルカを探さないと。この身体ではすぐに見つけられないかもしれない。でもこの世界があるのならアイツはまだこの世界にいる。

「ルカを絶対殺してやるから！ 夢砕きの身体を追い出されようと私は絶対にこの世界を終わらせてやる！」

その時夢砕きが左目の口を開いた。

「エイジくんが来たみたいだ」

私はこちらに向かって来る自動車を見つけた。

その車からエイジの思考が感じられた。

私の目の前で後輪を滑らして車は止まった。

「逃げちゃ駄目だよ。七番目のルカ」

夢砕きは私の思考を読んだのかそう言った。

車から降りたエイジは私を見るなり、弱々しく笑って夢砕きを見上げた。

「塔つてこの人の両腕だったんだね……　すごく大きくて、かつこいいなあ」

エイジはふらついた足取りで私の前まで来た。

「ルカさん、ボクは貴方ともっと話したいんだ。いいかな？」

エイジは片手を私に差し出した。その手をどうしたらいいかわからなかったけど、握ってみた。

「ルカさんの話をもっと沢山聞きたいんだ。だから話そうよ」
私の視界がぼやける。

*

エイジが目を覚ますと、隣にはルカが寝ていた。

夢の中で生まれた肉体のない僕と、肉体を失って夢を見続けているルカ。

相変わらずボクの手足は出来あがってないけれど、ボクは夢ではなく本当の世界という奴をこの目で見る事が出来た。きっとルカさんは目が覚めた時、訳わかんなくなつて泣いてしまんじゃないかなと僕は思った。

結局、夢の世界『ルカ』は消えてなくなつたらしい。その中で生き永らえていた人たちと共に。オリジナルのルカが死んだからではなく、今僕の横にいるルカが、夢を見るのをやめたから……　らしい。

ルカの夢の中で生まれたボクは本来なら消えるはずなのだが、カゲロウの遺言によって機械の身体を作って貰った。どうしてカゲロウがそんなことを言ったのかボクにはわからない。もしかしたら、夢の中で生まれたボクは永遠の研究対象として実験台になってしまっただけかもしれない。ボクには身体どころか脳みそだってなかったのだから。

ボクは人工知能とも違う物らしいけど、まあ…… そんな事はどうでもいいか。

とにかく、ボクはルカが目覚めたら聞かなければならないことがある。

今日のシャンプーは何番をつかえばいい？ ってね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8802p/>

ルカと壊す世界

2011年3月9日21時55分発行